いるのでした。

ふるさとの浅川村（浅川町）では小さいころから自然が大好きで、野山で遊ぶのにむちゅうだった富三です。最初、勉強はあまり熱心ではありませんでした。しかし、小学校の五年生ぐらいになると、急に成績が上がりだしてきたのです。これに、本人の努力も加わって、小学校卒業のころには、担任の先生から、

「君の学力なら東京のどこの中学を受験してもきっと合格する。」

といわれるまでになっていました。

さて、先生にすすめられて受験にやって来た府立一中です。筆記試験は思ったよりもやさしく、富三も心の中では、

「あんがい、かんたんに合格できそうだな。」

と思っていました。

ところが、面接試験にはいったとたん、先ほどのようなこまったことになってしまいました。実は、富三の話す言葉が、面接にあたった先生にはさっぱりわからないと言うのです。

生まれてからもの心つくまで、ふるさとの浅川村から一歩も外に出たことの